

心の輪がつながる時

私は十一歳のときからダンスをしている。ダンスは音楽に合わせて演じられる表現方法の一つで、音のとりかたや、気持ちののせかたによってさまざまな種類がある。

今年、私はある一人のダンサーに出会った。その人は聴覚障がい者で、暗闇の中で光を身にまとい、踊る世界的なダンスチームの一人として活躍していた。どうして聴覚障がいがあるのに、そのうえで暗闇の中で踊るという視覚的な制限もあるチームに入ったのか不思議に思ったが、その人は「僕は耳が聞こえないから、視覚で楽しめるダンスの作品に関わりたと思っていた。このチームの作品を見たとき、音楽が聞こえなくても目で見て楽しめた。」と話していて、なるほどと思った。

「音楽が聞こえない」。ダンスを音楽に合わせて踊っている一人として、「音楽が聞こえない」は自然と「踊れない」の考えに結びついてしまっていた。でもそうじゃない。音楽は聞こえなくても踊れるんだ。音楽という土台の上に、ダンスがあるという私の誤解は、この人と出会って変わった。

そこから私は障がいを持ちながらもダンスを踊っているたくさんの人に興味を持ち始めた。知っていくたび、全員が自分のありのままの姿で「踊る」ことの意味を教えてくれているような気がした。聴覚障害のあるダンサー以外にも、車いすのダンサー、低身長症のダンサー、自閉症のダンサー、盲目のダンサー、たくさんの価値観と身体をもつ人たちだからこそぶつかってきた壁があり、伝えられるものがあり、その人だけが踊れるダンスの強みがある。障がいの種類、年齢、性別関係なしに、自分たちのありのままの音楽表現ですべての人の可能性を広げていくそんな姿を見て、「私もこんなふうに踊れる人になりたい。」と思うきっかけになった。

そんな中、今年の夏にダンスの後援があった。その公演の中で、私は障がいをもつたくさんのダンサーさんと交流する機会があり一つの作品を踊りきることができた。この作品を通して私は改めて、ダンスに障害の有無は関係ないと思えた。ダンスに適した身体なんてない。ダンスだけではなく、勉強に適した身体も、スポーツに適した身体も、働くために適した身体も、何一つ、適した身体なんてない。少なくとも、この公演を見に来てくださった方にはそれが伝わったのではないだろうか。なぜなら、公演後の拍手が「一生懸命に頑張って踊ったダンサー」に対してではない、「感動を届けてくれた1人1人のダンサー」への敬意の拍手だと確信することができたからだ。ダンスを通して障がいに触れ、一緒に踊り、ありのままの気持ちを伝えた瞬間。これが私の心の輪がつながったと思えた瞬間だった。

この地球に住むわたしたちはいろんな個性で溢れている。みんな同じではなく、みんながみんな違っている。その違いに否定という感情が出てきてしまうと、そこには差別が生まれる。否定をうまないために私たちができることはなにか。まずは、障がいについて正しく知ることだと思う。自らが障害に触れ、学び、伝えていく。これが「心の輪を広げること」ではないだろうか。この作文を書き、そう思った私はこれからもこの学びを伝えていこうと思

う。

ダンスを通して繋がることができた、たくさんの障がいをもつダンサーさんたちへの敬意をこめて。